
未来への道

啓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

未来への道

【著者名】

啓

N6937F

【あらすじ】

告白には、雰囲気が大切！そんな、皆が願う恋愛ストーリー

今は八月。今年も暑い夏がやつてきた。夏と言えば、海・プール・花火！今年はどれも楽しくなる。だつて、大好きな人と一緒にいることができるから。

去年は友達としたけど、あんまり盛り上がり上がらなくて楽しくなかつた。でも今年は、彼とずっと一緒に。これだから学生はいいんだよね。だつて、働いてたら夏休みなんてないだろうから。

あつ。まだ、私の名前言つてなかつたね。私の名前は、山川夏稀。やまかわなつき。後、彼の名前は水本優輝みずもとゆうきって言うの。いい名前でしょ。あれ？小説なのに、なんで読者に話しかけてくるんだつて？細かいことは気にしないの。

それに、その方が読みやすくない？この話はね。私が本当に感動した出来事の話だよ。そしたら楽しんでね。

今日から、やつと待ち望んでいた夏休み。今年の夏休みは、一味違う。今年は、優輝と一緒にいろんなところに遊びに行くんだ。ある意味、毎日デートが出来る！

まず今日は、海へ泳ぎに行く。だけど、優輝と一人で行くはずだった海なのに。優輝が、

「二人ではいつでも行けるんだから、何人か誘つて行こう。」と言つて、優輝は勝手に友達を四人も誘つていた。

私は、優輝と二人で行けると思つていたのに！私は怒つた。

「なんで！私は、一人で行きたかったのに！」

優輝は、私が怒つてるのにもかかわらず、小さく微笑み私の顔を見た。

「ごめんな。俺も一人の方がいいとは思つたんだけどさ。俺、今しか作れない思い出を夏樹と作りたかったから・・・。二人の思い出はいつも作れるけど。みんなとの思い出は、今しか作れないから。

「何よ！そんな事言つたって、許さないんだから！一人で行きたいから断つてと言いたいところだけど、誘つちゃつたら仕方ないね。今さら断るのも悪いから。でも、次に海に行くときは絶対に一人じやなきや嫌だからね！」

優輝は

「いいよ。」と言つた。私も、まだまだ甘いのかな。ここは、押しきつて誘つたのは断つてと言つて断らせるべきだつたかな？

でも、一つだけはつきりした。優輝は、かなり先のことまで考えてくれている。ただ、そんな優輝にフラれないか不安。優輝は、いつも私の事を考えてくれているのに、私は自分のことしか考えてない。もしも、そんな私に優輝が疲れてしまつたらと思うと不安。今まで、二人が言い合つた喧嘩はした事がないけど。それはいつも、私が一方的に言うだけで、優輝は、ほとんど言い返しては来ない。ある程度、私が言い終えると優輝は、ニコニコと笑い

「落ち着いた？」と言つて私をなだめてくれる。

私はきっと、優輝以外の人だったら見捨てられているような気がする。普通は、いろいろな事を言われたら我慢できずに思いつきり言い返してくるはず。

でも、優輝は言い返すどころか、私の事をなだめ許してくれる。本当に心の広い人。もしかしたら、私にはもつたいないのかかもしれない。

私と付き合つて、優輝は本当に幸せなのかな？最近、ずっとそんな事を考えてしまう。

でも、今は優輝やみんなと海へ行つて思いつきり遊ぼう。優輝と私は、みんなとは別の車で向かつた。残りの四人は、いろいろと荷物を用意するために、私たちとは別行動してくれた。

車の中は、私と優輝の二人つきり・・・つて、そんな事いっぱいあるから、逆に気を使つて欲しくなかつたのに！優輝も少し怒つていた。

「まったく。ありえないよな。せっかく、みんなで行くんだから、三人三人に分かれて移動すればいいのによ。そこに気を使う前に、他で使えってのー！」

優輝が怒るのは、本当に珍しいことだった。優輝は、自分がどんなに嫌な目に合つていても、ほんと怒ることはない。優輝が怒るとなれば、意味のない事をされるのと、他人を傷つけられること。「ほんとよね。でも、みんなが気を使うのは、わからなくもないんだけどね。みんなは、少しでも一人でいらっしゃるようにしてあげたいと思つてるんだと思う。」

「うーん。それは、わかるんだけどな。それでも、やっぱ納得いかねえ。せっかく、みんなとの思い出を少しでも作るために、計画したのに・・・まあ、いいか。とりあえず、今日は楽しもつな。」

私は、

「そうだね」と言った。私もあまり納得できないけど、ここで優輝と同じように怒つていたら、優輝の機嫌は悪い今まで、海についてもいい思い出が作れないから。

だから、優輝が納得してくれてよかったです。私と優輝は、その後車の中ですつと話しながら海へと向かつた。一時間ほど経ち、やつと海が見えてきた。

私は海が見えた瞬間に、

「海だ！」つと、大きな声を出してしまった。優輝は笑顔で、「ほんとだ。」と言つた。私は優輝が、運転中だからあんまり興奮しないように、したかったのだけど無理だった。

「見て見て。綺麗だよ。やつた！海だ！早く泳ぎたいな。」

運転中で、あまり海の方を見れない優輝は、私に言つた。

「そうかあ。夏稀が喜んでくれてよかつたよ。よしーちょっと飛ばすぞ！」

優輝は、アクセルを踏み少しでも早く着けるようにしてくれた。優輝が飛ばしてくれたおかげで、すぐに着いた。車を駐車場に止めると、私は車からすぐに降りて海へと走つた。

私は、足を海につけた。冷たくて気持ちいい。周りにもあまり人はいない。私たちは、良いタイミングで来たみたいだ。

「夏稀。少しは手伝ってくれよ。俺一人じゃ、荷物を持ちきれない。」

「荷物と言つても着替えと、食料だけなのに。少しは、頑張つて欲しい。」

「そんなんに、荷物もないんだから頑張つてよ。男でしょう。」

「なんだよそれ。男とか関係ないだろ。せつかく、遊びに来てんだから荷物運ぶくらい手伝えよ。」

私は、

「いや。」と言つて海の冷たさと潮風を感じていた。優輝は、荷物を浜辺に置き、私の隣にきて背伸びをした。

「うーん。気持ちいいな。いい天気で風が気持ちいいよな。やっぱ、海はいいよな。」

久々に、優輝が心から気持ちよさそうにしている姿を見た気がする。いつもは、バイトや学校が忙しくてあんまりリラックスする暇がない。一応、私に会ったときは

「心が安らぐよ。」とは言つてくれるが、私はいつも、優輝にわがままを言つから優輝は、心が安らぐどころか毎日、辛いんじゃないだろうか？

優輝から見て、私はどんな感じなのだろうか？優輝は、本当に幸せなのかな？ダメだ！また考えてしまつ。こんな事を考えるより、今を楽しもう。それが、私にとつては一番のよくな気がする。

「そういえば、あいつら遅いよな。どこで何をやつてんだか。夏樹、先に泳いどくか？俺は、いろいろ準備するけど。」

「いいよ。みんなが来てからにする。一人で泳いでも面白くないしけど、浜辺を散歩してくるね。みんなが来たら、呼びに来てよ。」

優輝は、

「わかった。」と言つて荷物から着替えや食べ物と出していき揃えていつていた。

私は、ゆっくりと浜辺を歩いた。私は優輝と今後どうするべきか、今後どうなるかを考えた。

私は、わがままで自分勝手。いつも相手の言つ事を聞かないし、理解しようともあまりしない。そんな私とは逆に、優輝は相手の事を理解し、相手の考えをしつかりと受け止めてくれる。ただ、納得のいかない事だけは絶対に反対する。

でも、優輝は本当に私の事をよく理解してくれていると思う。私がわがままを言つても、優輝は必ず

「そうだよな。」と納得し考えてくれる。

私のわがままが通るかは別にしても、私のわがままを

「絶対に違う！」とは言わない。優輝が次の日に、朝の早くからバイトがある日に私が

「今日は一緒にいたい」とわがままを言つても、優輝は絶対に
「いいよ。」と言つてくれる。

私が泊まる日は、優輝はほとんど寝ることはない。私が寝るまでは、絶対に寝ない。私が起きる時には、優輝はバイトに行つている。いつも起こさないように静かに出てかけて行つてくれる。

そして、必ず置き手紙がある。メールだと、私を起こしてしまは可能な性があるためらしい。内容は、だいたい決まっている。

「おはよ。今日はいつも時間に終わるから。行つて来ます。部屋の鍵、ちゃんと閉めとけよ。」

私は、その手紙を読んでから家に帰る。こんな事を、いつも繰り返ししている。たぶん。優輝の睡眠時間は、毎日4時間あるかないかぐらい。もちろん。私が家に行かなければ、優輝はゆっくりと寝れるのだが、私にはそれが出来ない。

でも、最近優輝が冷たくなってきたような気がする。最近は、あまりにも何度も家に行こうとしたりすると、優輝が真面目な顔で私に向かつて言う。

「俺の家に来るのはいいけどよ。友達と遊んだり、親と一緒に一日いたりとした方がいいぞ。俺の家には、いつでも来れるけど。友達

とは今しか遊べないし、親とは出来る限り一緒にいた方がいいぞ。」

私には、その意味がわからない。友達や親よりも、彼氏を優先することの何が悪いのかが。だから、いつも気にせず優輝の家に行くのだけど。優輝は、何か意味があつていつているとは思う。

でも、今の私には理解できない。私は一人でいるのが嫌だから、優輝の家に行き寂しさを忘れようとしているのに、優輝にはそんな気はないのだろうか？

私は、親と一緒に住んでるから、まだ完全に一人なわけではないが、優輝は一人暮らしだから私が来ない日は、いつも一人で家にいる。

じつやつて、落ち着いて考えていると、私には優輝はもつたいないのかなと思う。やっぱり、優輝には幸せになつてほしいから、別れた方がいいのかな。

私が浜辺を、ゆっくりと歩きながら考え方をしていると、「夏樹！」と優輝の声が後ろから聞こえた。私は、足を止めて振り返つた。優輝は、私の前で止まり私の手を掴んだ。

「さあ。戻るぞ。みんながやつと着いてな。とりあえず、もう昼だから飯を食うことになつたんだ。早く戻らないと、みんなに全部食われちまう。」

優輝は、私の手を握つたまま走り出した。

「ちょっと。早いよ。もう少しゆっくり行こう。」

「何言つてんだよ。飯が無くなつたら大変だろう。でも、もう少しゆっくり行くか。走つて戻つても、すぐに食べられないもんな。」

優輝は、私の手を握つたまま走るのをやめて、歩いてくれた。

「ごめんな。夏樹の事も考えずに、急に走りだしちまつて。飯なんかいつでも食えるもんな。それよりも、この海を見ながら歩いた方がいいもんな。」

優輝は、歩きながら私に言つた。優輝は、疲れておなかが空いていたから早く戻りたかったのだろうと私は思う。

でも、優輝は自分のことより私に気を使つてくれた。すぐに戻つ

ては、この景色をゆっくりと見る時間が無くなってしまうからと思つたのだろう。

私は何をしているんだろう。『こんなに、優輝は私の事を思つてくれているのに、私は自分の事ばかり考えている。私はほんと、ダメな女なのかも知れない。

「優輝。いつもごめんね。』

「なんだよ急に。何を謝つてんだよ。』

優輝は、不思議そうな顔で私を見た。私は、そんな優輝を見た瞬間に涙がこぼれた。優輝は、足を止めて私の正面にまわった。

「なんで泣くんだよ。どつか痛いのか？足か？さっき走った時に、くじいたのか？」

「・・・。違うの。ごめんね。急に泣いちゃつて。優輝は、本当に優しいね。優輝は、いつも私の事を考えてくれる。けど、私は優輝に何もしてあげれない。私はいつも、迷惑をかけるだけで優輝にとつて重りになってるんじゃないかと思つて・・・。』

私は、優輝がどんな顔をしているのかが涙で見えなかつた。私は、手で顔を隠した。

「夏樹・・・。いつもそんな事を考えていたのか？ごめんな。夏樹が苦しんでいる事に俺は気付かなかつた。でもな夏樹。俺は、夏樹が重りになつてゐるなんて思つた事がないし、夏樹はいつも俺に大切なものをくれてるよ。』

「そんなはずないよ。だつて・・・。だつて、私はいつもわがままを言つてるだけだよ。私、ずっと考えてるの。このまま、優輝と一緒にいて、優輝は幸せなのかなあつて。』

すると、優輝がいきなり私を抱きしめた。私は驚いて、顔から手をどけた。

「夏樹。俺は、夏樹から自分の居場所をいつも貰つてるんだよ。俺は、一人で何でもしなければいけないと、いつも思つてる。けどな。それはある意味、自分を追い込み寂しい人間に変えていつてしまつんだ。でも、夏樹といると自分は一人じゃないんだと思えるんだ。』

自分の事を思つてくれていい人がいる。そう考えられるようになるんだ。だからさ。俺は今、とても幸せだよ。夏樹と出会えて本当に良かったと思つてる。俺が幸せだと思わないときは今だ。夏樹の泣いてる姿を見ることが、俺にとつて一番の不幸だ。だから、もう泣くな。いつものように笑つていてくれよ。」

優輝は、私の肩に手を置き少し離れ私の顔をじつと見た。

「本当? 私でいいの?」

「おう。そうだ! 明後日の花火大会は一人で行こう。そこで、今の夏樹の思いをぶつ飛ばしてやるよ。」

私は、よく意味が理解できなかつたが

「うん。」と言つた。優輝は、笑顔で私の手を握つた。

「よし! そしたら、決まりだな。それじゃあ、みんなのところに戻ろうか? さすがに、帰りが遅いから心配してんかもな。」

私は涙をぬぐい、ほほ笑んだ。そして、ゆっくりと優輝と歩き始めた。私、どうしてこんな事を言つたんだろう? でも、嬉しかつた。優輝の気持ちを知ることができた。

まだ、少し不安で気持ちの整理が出来ないけど。でも、優輝が私を思つてくれている限り、私は優輝にずっと付いていくことにする。そう考えている間に、みんなの待つてている場所に着いた。みんなは、もう食べていて盛り上がつていた。

優輝と私が戻つてきたことに気づいた友達が、

「遅いよ。」と言つて迎えてくれた。優輝と私は

「ごめん。」と言い、みんなと一緒にご飯を食べた。ご飯を食べ終わつた後、みんな海で泳いだ。

私と後の女の子二人は、近くにあつた、もつ誰もいない海の家で着替えた。優輝と後の二人は、タオルを腰に巻いて着替えたようだ。女みんなが、着替えて男の方へ行くが、別に何も反応なく、

「よし! 泳ごう。」と一人の男が言つて、みんな海に入った。

私は、優輝に近づき

「どう?」と聞いてみた。優輝は、私の方を向き

「かわいいよ。」と言つてくれた。

私と優輝も、海の中に入り遊んだ。ビーチボールで遊んだり、ショノーケルをつけて泳いだりと、みんなでおもいっきり楽しんだ。遊び続けて何時間がたつただろう。気がつけば、夕方になつていた。私は、疲れてきたので海から出て浜辺に座つた。それを見た優輝が、

「そろそろ帰ろう。」と言つた。みんなも、疲れてきていたようで優輝の意見に賛成した。

また同じ場所で、女と男にわかれて水着を着替えた。着替え終わった後は、みんなでゴミの片づけをした。片付けが終わつた後、来た時と同じように車に乗つて帰ろうとした。

私は、優輝が何か言うんじゃないかと思ったのだが優輝は何も言わずに車に乗つた。来るときは、三人ずつで来たかつたのにと言つていたのに、帰りは何も言わなかつた。

私も車に乗り、みんなに

「またね。」と言つて車が発進した。やつぱり、優輝は何も言わなかつた。私は気になり聞いた。

「ねえ優輝。どうして帰りは、もう一人乗せて帰らうと思わなかつたの？」

「え？どうしてって言われてもな。まあ、来るときは違つてことかな。来るときは、楽しむことが目的だつたけど、帰りは違う。夏樹も今日は、かなり疲れただろうから、どうせなら一人で帰つた方が静かにできて、休めるかなと思ってな。」

そうだつたんだ。優輝は、私が疲れてるから少しでも休めるようにするために。

「ありがとう優輝。それじゃあ私、少し休むね。」

私はそう言い、車の中で眠つた。私は結局、優輝に起こされるまでずっと寝ていた。私は、頭がボーとするなか車から降りた。

優輝も車から降りた。私は、優輝の方を向いた。

「今日はありがとう。楽しかつたよ。また行こうね。」

「ああ。夏樹、明日の花火大会忘れんなよ。明日はゆっくり休め。疲れたまじや、花火大会は楽しめないからな。」

私は頷いた。優輝は

「じゃあな。」と言い。車に乗った。私は、優輝に手を振った。優輝も手を振り返してくれ、その後車を発進させた。

私は、家中に入った。今、家族は旅行中で私は家でお留守番。私はとりあえず、着替えたものを洗濯し、お風呂に入った。私は、お風呂につかりながら今日の事をゆっくりと思い返した。

今日の私は、いつもとは違うような気がした。いつもは、強気でいるのに今日は、弱気だった気がする。物事を悪く考えてしまい、優輝に心配をかけてしまった。

優輝は、私といて幸せだとは言っていたけど。本当に幸せなのだろうか？今は良くても、いざれば私の事を嫌いになるんじゃないだろうか？

でも、今日は本当に楽しかった。いつもより、ずっと楽しかった。いつもは、優輝と二人だけど、今日は優輝と友達が一緒だったからいつも倍は楽しかった。

優輝の言う通りにしていて良かった。もしも、そのまま優輝と二人で行つていたら楽しいことは楽しかつただろうけど、こんなにも楽しくはなかつたと思う。

私は、本当に幸せ者だ。優輝がいてくれるおかげで、今年の夏休みは今までにないぐらい楽しむことができそう。次は、花火大会だし。

でも、優輝は何を考えているんだろう？私の思いを吹き飛ばすつて、どういう意味なんだろう？私が抱えている悩みは、優輝のこれから幸せの事。それを吹き飛ばすことなんてできるのだろうか？

まあ、考えても仕方ないし、そろそろ出よう。私は、お風呂から上がつた。私は、髪の毛などを整えてから部屋へ行きベッドに横になつた。

ベッドに横になると、すぐに眠りにつくことができた。

私は、携帯の鳴る音で目を覚ました。私は携帯を開いた。優輝からメールだ。

（昨日はお疲れさん。さすがに、もう起きてるよな？明日の花火大会だけど、夏樹の家に十九時に迎えに行くからな）

という内容だ。もう起きてるってどういってどう？今何時だろ？私は時計を見た。もう、十四時だ。さすがに、寝すぎていたみたい。

私はとりあえず、優輝に了解とメールを打つて返した。私は、ベッドの上に座りボーとしながら、テレビをつけた。別に何か見たいわけではないのだが、なんとなくつけてみた。

私は頭がボーとするなか、またベッドに横になった。今日は、もう動く気になれなかつた。体もだるいし、別に何か約束があるわけでもないので、もう一度寝ようと思つたのだけど、今は夏休み。暇な時には、宿題をしよう。

私は、ゆっくりとベッドから起きて机に向かつて座つた。とりあえず、簡単で早く終わるものから片付けた。宿題の半分を終わらしたところで、私は止めた。時計を見ると、十九時だつた。

私は、リビングに行き夕飯を作つて食べた。ご飯を食べ終わつた後、私は少し休憩し、お風呂に入つた。お風呂に三十分ほど入り、出て髪の毛を整えて部屋へ戻り、ベッドに横になつた。

私は、明日の事を考えると楽しみでなかなか寝ることができなかつた。私は、なんとか寝ようと頑張るがやっぱり寝ることができなかつた。

私は、とりあえず本を読むことにした。今読んでいる本は、恋愛小説でかなりロマンチックなストーリー。こんな恋愛がしたいと思うぐらい。

私は、小説を読んでいるうちに眠なくなつてきて、眠りについた。私は珍しく、朝に目が覚めた。いつもは、毎ぐらこまで寝てているのに今日は、八時に起きた。

ちよつと、興奮すぎかな？さすがに、起きる時間が早すぎる。

でも、いいか。これでゆっくりと、準備することができる。

今日は、花火大会だから浴衣を着て優輝を驚かせてやる。だけど、浴衣を直した場所を忘れてしまったので、これから探さないといけない。まえに、着たから家にあるのはわかつてんんだけど、直した場所を忘れてしまい、見つからなければ驚かすことも出来ない。

だから、早く起きてよかつた。ゆっくりと探すことができる。私は、家にあるタンスから押入れから全部見て探してやつとのことで見つけた。ほとんど来ていなかつたおかげで、かなりきれいな状態でのこつていた。

浴衣を見つけるのに、かなりの時間がかかった。探し始めたのは起きてから一時間ほどたつた九時からで、見つけたのは十一時。三時間も探していたらしい。出しては、片付けと繰り返していくから時間がかかったのかな？

これからは、出来るだけ手前にしまつておくことにしよう。まだ、優輝が来るまで時間があるから、少しだけ勉強しよう。お昼を食べた後で。

私は、お昼ご飯を作り食べて少し休憩してから、部屋へ戻り勉強した。昨日は宿題を半分ほど終わらしたが、今回は五時間ほどしても三分の一ほどしか出来なかつた。

私は時計を見た。もう十八時半なので、そろそろ浴衣に着替えて優輝を待つことにしよう。

私が、浴衣に着替えるついでからすぐに家のインターホンが鳴り優輝が来た。私は、財布と携帯だけ持つて出て優輝の顔を見て「おまたせ」と言った。

優輝は、私を見て少し驚いた感じだつた。私は、優輝に「どう？似合つ？」「どう？」と聞いた。

「うん。似合つてるよ。なんか、いつもとは違う感じだな。」「そう？でも、よかつた。久しぶりに浴衣着たから、似合つてなかつたらどうしようかと思つた。」

私は、優輝の前に立ち優輝の手を取つて手をつないだ。優輝は、

一瞬恥ずかしそうにしたが、しつかりと握り返してくれた。

私と優輝は、手をつないだまま花火大会の場所へと向かった。花火のあがる近くまで行くと出店があり、かき氷やフライドポテトなどを買って食べた。

花火は二十時からで、今は十九時五十分。そろそろ、花火が見えるところへ移動しようと思い優輝の方を見た。優輝も私の方を見た。

「そろそろ、花火の見えるところに行こうか？」

私は頷き、優輝についていった。優輝は私の手をひっぱりながら、みんなが見るところとは別の場所へと向かっているようだった。近くの坂を上っている途中で、茂みの中へと入った。

茂みを少し入ると、道のような感じになっていた。でも、これは無理やりに作つたような道になっていた。私は、優輝に聞いた。

「ねえ。どこへ行くの？ それに何この道？」

「悪いな。出来るだけ、怪我しないようにと思つてしておいたんだけど、やっぱり駄目か？ でも、ここを抜けたら一番の花火スポットにつくから。ごめんな。」

私は、

「そうなの？」と言い、優輝の言う通りについていくことにした。どちらにしても、ついていくしかないんだけど。思つていたよりも早く、茂みの中を抜けた。

私は、驚いた。茂みを抜けると、急な斜面になつてあり、知らずに来たらこのまま転げ落ちてしまうかもしれないほど、足場が狭かつた。

「よしー。ぎりぎり花火に間に合つたな。ここが、俺の秘密の場所さ。夕方は、ここからきれいな夕日が見えるんだぜ。まあ、危ないから、あんまり来ることはすすめないけどな。おつ花火があがるぜ。」

優輝がそう言うと、最初の花火が一発打ち上げられた。優輝の言うとおり、よく見える。その後も、次々と花火は打ち上げられた。

優輝は、花火を見ながら言った。

「どうだ？ ここに来て良かつたか？」

私は

「うん」と言つて花火を見続けた。優輝も私も何も言わずに、ずっと花火を見ていた。花火も終盤を迎えて、最後のクライマックスとうところで優輝が、私に一言言つた。

「夏樹。結婚しないか？」

私は、びっくりして優輝の方を見て聞き返した。

「えっ！なんて？もう一回言つて？」

「うん。だから・・・結婚しよう。」

私は、嬉しくて涙が出た。まさか、ここに来てプロポーズされるとは思つてもみなかつた。

「おいおい。泣くなよ。まだ、返事聞いてないぜ。ダメか？まだ、早いと思つてるなら、いつまでも待つから。」

「優輝・・・。ありがとうございます。私で良ければ、お願ひします。」

私は、優輝に抱きついた。優輝も私を抱きしめてくれた。それと同時に、最後の一発が打ち上げられた。最後の花火の光が、一瞬私と優輝を包み込むようになつたような気がした。

優輝は、私の肩を持つて少し離れ私の顔を見た。

「夏樹の悩み、全部吹き飛んだだろ？夏樹のおかげで、俺も決心できたからな。絶対、幸せにするからな。」

私は、海に行つた時に優輝が言つた事を思い出した。あの時の言つていたことは、こいつう事だつたのだと思った。

私は

「うん！よろしくね。」と言い、優輝にまた抱きついた。私と優輝は、ある程度たつてから手をつないで帰つた。

私は、今日という日を忘れない。私にとつて、最高の日になつた事を。

その後、優輝は学校をやめて仕事についた。私にプロポーズする前から、就職が決まつていたらしく、すぐに学校をやめて働いてくれた。それからすぐに、私と優輝は結婚した。

私は、優輝と結婚出来て本当に良かつた。これからは、幸せにな

ります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6937f/>

未来への道

2010年10月8日15時12分発行